

【喪失そして心の傷み】 —父親を喪った6歳児の心の混迷を辿る— (1973)

Martha Harris

この論文は、6歳になる或る男児の7回に亘るセラピー・セッションのあらましを軸として展開します。彼は父親の突然の死に遭遇して3ヶ月を経たばかりでありました。ここで試みられておりますのは、父親との死別によって深く心の内で葛藤をきたした彼の情動の複雑な性質を示し、それがどのようにセッションにおいて取り組まれたかを叙述することにあります。そうした混乱は、或る意味何らかの退行的な病へと陥りかねないわけですが、そうした事柄に限らず、彼のパーソナリティの要因やら彼の外的及び内的な対象との関わりについても大いに注意が払われております。その結果、彼の‘喪の作業’がひとまず片付けられたというわけで、これ以上の分析的 analytic な援助を必要としない事態に至ったものと判断されたのです。ここで敢えて‘分析的 analytic’という言葉を使いましたのは、セラピー開始の当初からセッションの回数はおそらくごく限られたものになるとの考えがあったにせよ、これらセッションで用いられた技法は、子どもが私に伝えんとするさまざまな事柄に寄り添い、それらの意味を解明せんとする努力がセラピー場面での‘転移’に焦点づけられていたからであります。彼の提示した臨床素材はそうした心の痛苦というものをきわめて精確に示しておりましたし、それはまた、喪われた人への哀悼を分かち合う他の家族らの苦悩によってさらにいっそう募らせていたものと考えられます。

Mrs.Jは、息子のジェームズについて私に相談しに訪れました。担任の教師の友人からの口利きに拠るものでした。彼女は30代前半で、ちょっと小太りで、いかにもてきぱきした感じの魅力的ともいえる女性でありました。顔はなにやら青褪め、耐え難い感情に辛うじて耐えているといった印象がありました。彼女は入室するや、開口一番、<ああ、やっと光が射してきたわ。私はもう諦めかけていたんですよ・・・>と言います。

それから彼女は、3ヶ月前に夫を亡くして以来、ジェームズとの間に起きたスツァモンダの悶着について詳細に語ってゆきます。彼女には二人の息子がおり、ジュリアンとジェームズという名前で、それぞれ8歳と6歳になります。ジェームズはどちらかというと気質的に難しいものがあります。自己主張が強く、攻撃的でもあり、知能は高い方ですし、情熱的なところがあり、母親にとっても愛着していると言えます。彼と父親との間柄というのは必ずしもうまく行っていたわけではありません。それは彼らが似た者同士だったからです。父親がジェームズに怒鳴ると、彼もまた怒鳴り返すといったふうでありました。ジュリアンと父親との間はずっと穏やかで親しみ合っていたと言えます。彼女の夫が突然亡くなったとき、彼女はそれがジュリアンの方に影響を与えないはずはないと思ったのです。ところが逆でありました。確かにジュリアンは泣きましたし、またずうっとしばらくは泣きじゃくってはいましたが、それで母親との関係はもっと親密になってゆきました。そうして彼の悲嘆はとにもかくにも治まったと見受けられたのです。しかしその一方でジェームズはというと、悲嘆に浸るところか、怒りまくって、始末に負えない、奇妙にも厄介な存在となったのです。父親の死を告げられたとき、彼は母親に対して、<お母さんは再婚しなくちゃ、今すぐになだよ・・・ああ、でもやっぱりそれってダメだ・・・ぼくの運動会が終わってからだね>と言ったんだとか。

母親に対して愛情を感じており親密でもあったということもあるのでしょう、ジェームズは彼女やら、もしくは兄さんが悲しそうにしているのを見るのが我慢ならないといったふうで、何かというと彼は苛立たしげで、始終屈託を抱えているといった有り様でした。そして彼は母親を咎めて、〈お母さんなんて全然ダメじゃんか！人を救ってあげられないじゃんか！（You are no good！ You can't keep people alive）〉と言ったりもしました。ジュリアンは困惑して母親に尋ねます。〈あいつ、ジェームズは一体どうなっちゃったの？なんでぼくを泣かせるんだ・・〉と。〈まるでジュリアンと私が彼の分までも泣いてあげなきゃならないみたいなんですのよ〉と、彼女は言いました。学校では、以前ですと勉強も他の子どもと遊ぶことも何ら問題なしに楽しんでいたのですが、今や不機嫌でぼんやりしたふうにだらだら過ごすことが多く、他の子どもとの間でも何かというと自分から喧嘩を買ってしまうといった具合なのです。或る日のこと、母親に対してカンシャク玉を破裂させた後、彼は泣き崩れ、〈ぼくって、もうぐちゃぐちゃだ。ひどくみじめで、だけどどうしてなのかわかんないし、もうどうしたらいいかもかんないよ〉と言いました。そこで彼女は、これはもう誰か専門家に助言を求めるときだと判断したというわけです。Mrs. J自身としては、夫の突然かつ悲劇的ともいえる死に徐々に耐えられるものと思っておりました。何故なら彼ら夫婦はとても幸せな結婚でありましたし、友だちも大勢いたからです。だけどそれも、今のこの予想外の事態、ジェームズとの間でもたらされる日々の厄介事やら困惑がなければというのが彼女の率直の気持ちなのであります。

そこでわれわれは、彼女がジェームズを私のところに連れてきて、何回かのセッションを受けるという段取りを決めました、それから彼女自身もまた精神科医に面談を受けるということが了解されました。こうして彼女は、ジェームズに、これから或るご婦人のところに連れてゆくからねと語ったのであります。父親が亡くなって以来、なぜそんなにも自分がぐちゃぐちゃでみじめだったらいいのか理解することをおそらく助けてくれるかもしれないから、と彼に告げたというわけです。

こうして初めて私の目の前に現れたジェームズの印象というのは、いかにも澁刺として、機敏でかつ落ちつき払った少年といった感じでした。母親からの分離は何ら問題なく、彼は私の部屋に入室した際、床の上に用意してあった蓋の開いた玩具入れの引き出しに飛びつきました。彼は何か中身を手でまさぐっておりました。そして1本のクレヨンを、まるでそれが汚いものであるかのようにちょっと顔をしかめて、外へはじき出します。〈たくさんおもちゃがあるねえ・・いや、そうでもない、そんなにたくさんでもない・・〉とかそんなことを何度も考え深そうに呟いています。ちょっとの間を置いて、私が彼に〈何か、探しているみたいだね。それって何か分かるかしら？〉と尋ねますと、〈うん、分かるよ〉と返答しますが、言いかけてはもう何も覚えていないといったふうで頭を横に振り、引き出しに戻って中身をいじっておりました。それからちょっと首を傾げるふうにして一度手を止めます。私はそれから〈お父さんのこと、探しているのかしら？〉と訊きます。すると、〈うん、そう・・〉とすぐさま彼は返答し、床に腰を降ろし、私の方に顔を向け、まともに私を見るというよりも、むしろ焦点の合わない目付きでぼんやり見遣ったのであります。

それから彼は語り始めます。思いの丈をぶちまけるように、セッションの最後までひっきりなしに語ったのであります。折々に私が言葉を挟みますと、彼はじっと熱心に聞き入り、懸命にそれについて考え込み、さらなる思いを吐露してゆくといった具合でした。私の語る言葉を、恰もそれが自分の心の内から聞えてくる声でもあるかのように聞いておりました。まるでそれこそが自らの最大の重要課題でもあるかのように、なにがなんでも分からなくちゃと懸命だったといえましょう。このセッションで、やがてどういうことが問題なのか判明してまいりました。彼はごちゃごちゃとひどく混乱しており、この混乱をなんとか正しく解明(sort out)しなくてはという必死な思いなのでした。ここで主要なるテーマを幾つか絞ってまとめてみますと次のようになります。

彼は、こんなふうに話し始めました。<そうなんだ。ぼくのお父さんは死んだんだ。ぼくは彼に会いたい。彼がどこへ行っちゃったのかしら。判らないんだ。いや、ぼく知ってる。彼は天国にいるんだ・・・> (この見解はどうにも典型的な論議の余地ありということになりましょう。すなわち、これが彼の抱えてる混乱の一部というわけです。) <天国にいるに決まってる。地獄なんかじゃないよ・・・>と、彼は言います。彼は床に坐り、セッションに来る際に手に持っていた【ビートルズ】のパンフレットを手先でいじっておりました。無自覚的にそれを折々に引き出しの下に潜り込ませます。その一方で、ああでもないこうでもないときまざまに思いを語り続けていったのであります。私のコメントにもしっかり耳を傾け、質問にも応じて、それをきっかけに自分のさらなる考えを推し進めてゆく、というか、むしろいっそう混乱を募らせ、そうしたごちゃごちゃした思いが次々にほとぼしるといった具合でありました。

彼は繰り返し父親が天国にいると強調します。地獄というものを彼は信じないのだそうです。だけど、天国がどのようなものかと考え込んでしまうのでした。私は、<君は、お父さんがどこか良いところに居て、ハッピーで、何ら苦しんでなどないって思いたがっているんだね>と伝えます。彼はそれに強く同意し、それから些か混乱したふうに私に一つ質問をしました。<もしもあなたが飛行機に乗っていて、どこか行こうとしていて・・・例えばパリからロンドンへといったふうにだけど・・・それで別の誰かがどこか他のところで飛行機に乗っていて、ローマとか、そうした場合、あなたの行く手を遮ることってできるものだろうか？>と・・・私は、その行く手を遮ろうとする人というのは、もしかしたら彼が今やその消息がさっぱり分からず案じている亡くなった父親のことを言っているのかしらと尋ねます。彼は繰り返します。<だけど、ぼく知ってるよ。お父さんがどこにいるのかってこと。だけど、どうしてもまた会いたいんだ。・・・それでぼく、自殺したらお父さんに会いに行けるかなって思うことがあるんだ・・・>と言います。私は彼にどんなふうにして死ねるって思ったのかしらと尋ねます。<鋭いナイフで、とかね。それからひどい病気になるって、それで死ぬとかだよ・・・>と答え、それからさらに、いっそう混沌とした面持ちでごちゃごちゃ支離滅裂な話を続けてゆきます。

私は、彼が父親のことを振り返り、ほんとうに自分のことをお父さんはどう思っているのかって考えようとしたらひどく混乱しちゃうみたいだねと語ります。つまり、彼は‘怒っているお父さん’なんか厭なのです。彼を見下し、彼が何ごとかしよとすれば必ず邪魔したり、またはおそろく死んじまえとか、おまえなんか

生きてる値打ちはないとか言ったりするお父さんなんて、とても考えたくないということなのです。その一方で、彼は‘いいお父さん’のことを思ってみるのです。そうしたお父さんを彼は愛したのだし、だから、もしかして地獄とか良くないところへと行ってしまったのかと思うと、もう気が気ではないわけで、その嘆きのあまり彼はいっそ自殺しちゃいたいと思うのです。ここで彼は私の顔をまともに見据え、<一つぜひとも言いたいことがあるとしたら、ぼくは—お父さんのこと—愛してたってことなんだ>と力説します。

私は、彼がそのことを、私に向かってと言ったというだけでなく、彼自身に向けても語ったということをご紹介します。何故かという、そのことは間違いなく真実であるとしても、だけど全部が全部そうとも限らないと彼は思っているからなのです。おそらくお父さんのこと愛してなんかいないってときもあったのではないかなと尋ねます。すると彼は、<ぼく、お父さんがぼくのこと怒鳴らなければよかったのと思う。ぼくもそれでお父さんに怒鳴り返したんだもの・・>と言います。私が、<それで君がお父さんを怒鳴って、それだからお父さんを病気にしたんじゃないかって思ったのかな>と尋ねます。彼は私の顔を凝視し、<人って小さいとき、とつてもとつても強いんだ。でも人が年をとったら、たとえ大声を出せたとしても、からだは衰弱しちゃう。そして死んでしまうってことになるんだ・・>と答えます。私は、彼の語ったことの根底にある意味について語ります。<君は自分がまだ小さいって分かってはいるけれども、ものすごく怒ったときなどは自分がすごくでっかくなって、まるで怪力の持ち主みたいに思えて、それで怒鳴ったりすれば、お父さんだっってひとたまりもない、吹っ飛ばされてしまいかねないって思ったんだね>と・・。

彼は、それから悲しげにこう語りました。<時にはぼく、お父さんがどんなふうだったのか忘れてる。思い出せないんだ。ぼく、お父さんのこと考えようとするんだけど。でももう姿形もないんだもの・・> 私は、彼が愛したところのお父さんが実際どんなふうだったのか、そのイメージを心の中に懐けないということとで気を揉んでいるということを取り上げました。彼は、<ぼく、お父さんの写真を2つ部屋のなかに飾ってあるんだ。一つは、彼は笑っていない・・ぼく、それが好きではない。もう一つの方はお父さん、笑っているんだけど、そっちは好きなんだ・・>と言います。ここで‘笑っていないお父さん’というのは、おそらく彼が怖がっているお父さんで、彼が何ごとかしようとするとそれをいちいち阻もうとする、あるいは怒鳴り返されたことで怒ったお父さんというわけだね、と私は彼に示唆しました。

それから彼は再び、<大丈夫、お父さんはちゃんと天国にいると思う・・>と言います。私は、天国ってどんなふうにしたのかと訊きます。どんな感じなのかと・・。彼はなんだかとんでもなく混乱したふうにあれこれ語ったのですが、要するに、‘天国’とは洞穴がいっぱいあって、その中はどれも真っ暗で、中には小さな動物たちがいるんだけど、誰もがそこに入り自由ってわけではないんだそうだ。私は、<そうした‘天国’って、まるでお父さんとお母さんが一緒に暗闇の中でベッドにいるって感じに似てないかな。お父さんが夜お母さんのからだの洞穴のどこかに居るって感じにも聞えるんだけど>と示唆します。彼はそれを聞いてぎょっとします。そして一瞬私の顔を咎めるような顔つきで見ます。彼は手にしていたパンフレットを折々に引き出しの下に突っ込んでいたわけですが、ふとその引き出しに眼を遣りました。<この(あなたの)引き出しって、まるでごちゃごちゃしてるよね。整頓しなくちゃダメだよ。誰だっ、

自分の‘ごちゃごちゃ muddle’は整頓しなくちゃいけないんだからね>と言います。それから続けて、彼はちょっと唐突に、笑い飛ばしてしまうかのように、或る友人の話をします。<あいつ、すっごくバカなんだ。もう頭の中がごちゃごちゃしててさ。誰かが《Henrietta Barnanaco》について話したのにさ、(ここでちょっとジェームズの舌がもつれます)彼は《Henrietta Banana ha-ha-ha!》のことを話していたって思ったんだよと言います。でもそれを言った途端、その話がまるで冗談にもならない、可笑しくもなんともないということに俄然気づいたわけであります。私が彼のことを頭が‘ごちゃごちゃ’してると咎めたみたいに思い、だから私〔つまりは、引き出しのこと〕が頭の中が‘ごちゃごちゃ’してるとか彼の友だちが‘ごちゃごちゃ’してると話をしてたりしたんだね、と私は語ります。なぜなら彼自らの‘ごちゃごちゃ’をうまく片付けるなんてとても出来やしないって感じているからだということも…。

ここで彼が口ごもってうまく発音できなかった《Henrietta Barnett》というのは有名な女子高校なわけですので、それを茶化して‘Banana’と呼んだ友達というのが実は彼自身であるという話を彼にします。というのは、学校とはまるで赤ん坊がお腹にいるお母さんみたいに子どもがいっぱいいるわけで、おそらくお母さんには女の子の赤ちゃんがいっぱいいるんだろうけど、でもお父さんが死んだから、もうその子らは誰も産まれてはこれないといったわけです。それで彼は、まるっきりお母さんが‘ごちゃごちゃ’した混沌でいっぱいいっぱいになっちゃってると思ったということのようであります。私はそれから、彼がパンフレットを引き出しの底の方へ突っ込んだり引っ張り出したりを繰り返していることについて触れます。おそらく彼はお父さんのからだの一部がお母さんのからだのなかに夜中に入ってゆくことに気を奪われているみたいだねと示唆します。それってどう呼んでいるのかなと尋ねますと、彼は<Willie(ペニス)だよ>と言います。私はそこで、彼は怒鳴ることで、彼のペニスからお父さんのペニスへと‘ごちゃごちゃ’やら‘ハチャメチャ’の汚いもの・厄介なものを投げ込んだって思ったのかしらと彼に言います。それでお父さんを病気にして死なせてしまったということばかりではなく、そうした汚いもの・厄介なものがお母さんのからだの中にもあるということを彼はひどく気に病んでいるってことについても…。ここでパンフレットを引き出しの下に突っ込むことで、恰も自分のペニスでもってそうするかのように、死んだお父さんのあらゆる‘ゴタゴタ’やら‘ハチャメチャ’を、そして彼の死んだお父さんに対して懐く思いやらもそこに投げ込んでしまったということになります(実際私が与えた引き出しをごちゃごちゃにしたのは彼でもあったわけですから)。だから今や彼の‘ごちゃごちゃ’は私の中であって、それを私がきれいにかたづけなきゃならないわけだけど、それってとても私には無理だ、できるはずないって、彼が恐れたってことでもありそうです。同様にして、お母さんだって、今や家族の中で抱えてしまった‘ごちゃごちゃ’を片付けるなんて、お父さんが生きていない以上、その助けを得ることなしにできるはずはない、と彼はひどく気を揉んでいるということにもなります。

彼は、床に腰をおろしたまま、静かに私の語るのを聞いておりました。私はあれこれ考えたまますを少しずつそして徐々に物事が明らかになってゆくようにと彼に語っていったわけですが、それを私が語り終えたとき、彼はいかにも感激したふうな面持ちで言います、<時として、あなたって全然‘ごちゃごちゃ’してないね！ ……ほんととはぼく、自殺なんかしたくないよ。…でもさ、やっぱり家族皆で、ぼくも一緒にね、

自殺するかも知れない。だって、そしたらお父さんと皆また一緒になるだろ・・・>と。これを語る前、彼はその手にしていたビートルズのパンフレットを、引き出しの底へではなく、彼自身のお尻の下へと突っ込むことを始めておりました。

私は、<私が話している最中、君の‘ごちゃごちゃ’がこれですっきり解決されてゆくみたいと思ったんだね。まるで私が頼もしい助っ人でもあるお父さんみたいに思えたわけかな>と彼に言います。彼は私の語る言葉を摂り込んだわけですが、それはまるで自分のからだの中に仕舞いこむみたいであり、そうしたことを彼はパンフレットを自分のお尻の下へと突っ込もうとしたことで私に示したものと考えられます。彼は、そんなふうに、家族皆を一つにしてくれる‘頼みの綱’としてのお父さんを摂り込もうと思ったのだということを私は語ります。すると彼は、<あのね、ぼく、からだのことを話したくない。だってそれって血のことを思っちゃう。だからいやなんだ・・・>と返答します。

このすぐ後に、もう終了時間が間近でありましたので、それを彼に告げ、来週もこの時間に待つこと、そうしたらこの続きをまた語り合えるだろうからと伝えました。彼は一瞬心外そうな顔をしました。そしてそれを押し隠し、すばやく来週またここには来たくはないと言います。ここで彼は立ち上がり、椅子に腰掛けます。私は、<おそらく今君は‘お父さん’になっていて、それで自分がどうしたいのかは自分で決めるからと言いたいんだね>と示唆します。そんなふうに取り決めごとを自分の一存でしたいということはすなわち彼がお父さんと怒鳴りあっていた当時、彼自身とお父さんとの間に起きたトラブルそのものであったのかもしれないかと示唆しました。<うん、そう。それが今、ジュリアンとの間でトラブルになってることなんだ。だって彼も‘お父さん’になりたがっているから・・・>と彼は言います。

このセッションのある時点で、彼の内側の‘ごちゃごちゃ’とそして父親を忘れてしまうこととの関連で、私は、父親の喪失というものを外側と内側とは別々だということを明瞭にしようとして、「2つの死」という言葉を彼に使ったのでした。すると、それに勝る案があるとでも言うかのように、ジェームズはすばやく異議を唱えます。<ぼく、死というのいろいろあると思う。外側で死んでいる、内側で死んでいる、それから外側と内側のどっちでも死んでいる・・・他にもあるみたい、ぼく忘れちゃったけど・・・誰かがぼくに言ってたんだ。でもそれ、ぼく、忘れちゃったけどね・・・>と。ここにもまた、私と張り合おうとする、競争心の強い彼の一面が覗かれます。何でも一番自分が知ってなきゃいけないということ、おそらくそれが父親と怒鳴りあいになった原因でもありましたでしょう。

どうやらこの初回のセッションの後、ジェームズは母親に、父親について語り始め、彼の病気についてもその詳細を尋ね、お父さんの墓参りに行きたいとも言ったようなのです。この1週間、彼は、母親そしてお兄さんとも一緒に、かなりリラックスして過ごせたようです。彼は翌週のセッションに私に会いに来るつもりではなかったようです。しかし母親が、<Mrs. Harrisにあんたは来週必ず来ますからと言ってあるんだよ。がっかりさせちゃいけないでしょ>と言いますと、<そうか、そうだね。がっかりさせちゃいけないよ>ということで、再び彼はセッションに意気込んでやって来たというわけなのであります。

この第2回目とそれに続くセッション、全部で7回になりますが、それらの詳細について語ることは致しません。ただここでは、最初のセッションから引き続けている幾つかのテーマを拾い上げてみることにします。そうすることで全体があきらかになるものと思われる。この最初のセッションにおいては、どうやら私は、時間の終わりが来たかと彼に告げるまでは、まったくのところ彼にとって‘外在する人’と見做されていなかったように思われます。ところが第2回目のセッション以降、彼は私に対して、かなり強烈な、情熱的かつ占有的な欲望といった、幼児的な感情を転移させております。そこには、分離 separation への憤りの感情をも伴いながら、さらには理解されることへの希望や期待感が入り混じっておりました。それ以降のセッションにおいて、私としては、私たちが一緒であるのはごく限られた時間内であることを承知し、そして終わりの時期をいつにするかじっくり見定めることが肝心だと考えておりました。

第2回目に彼が訪れてきたとき、彼はまるで古い馴染みのお友だちを訪ねるふうな物腰で何らためらいもなく上の階へと歩を進めました。彼は大きな椅子に腰掛けて、それから部屋の中をじっくりと見渡したあと、やおら引き出しへと眼差しを向けました。ふと画用紙の下を見て、前回汚いとでも思ったようにポイと捨てたクレヨンを見つけ、手にします。そしてまるで咎めるかのように<これ、先週どこかに隠したんじゃないか？>と私に言います。彼は、大きなMrs. Harrisの絵を描きます。彼女の足元には1本の花が置いてあり、エルフ(小妖精)と一緒にフットボールをして遊んでいるのです。そのエルフとは彼自身であることを認めます。それから彼は、自分についてとても嫌なことを言わなければならないと言い始めます。そして紙の上にそれを書き綴ります。<ぼくはブタだ・・みじめだったらしいやつだ・・・トカゲだ・・[I am a pig—I am a horror—I am a lizard]>と。私が、そうした彼自身の部分についてもっと語ってちょうだいと頼むと、彼は、<こんなふうに、ぼくの「ブタの部分」が《おまえはブタだ(You are a pig) ! 》って言うんだよ>と、大仰な仕草で私を指さしながら言います。私がこの投影について彼と一緒にあれこれさらなる説明を続けてゆきます。彼は、<ジュリアンが言うんだよ、《おまえはブタだ》って。ぼく、悪くないもの・・> (つまりこの言葉はそもそもジュリアンが言ったのであって、ぼくじゃないという意味。) <ジュリアンのせいだよ。・・・ジュリアンがぼくに「おまえは死ぬぞ」って言うんだもの・・>。それから、大きな口と歯を描きます。それは私の口だと言います。それで私の大きな口が彼の小さな口に投げ込まれ、それで彼を怒鳴らせるといったことになるんだとか。これを私は、彼が心底怯えている怖い死んだお父さんに繋げます。すると彼は悩ましげな面持ちで、<ぼく、よく眠れないんだ。ぼく、内側も外側もごちゃごちゃしてる・・>と言います。そこでわれわれはしばらくの間、彼がどうして怒鳴ったりするのか、或いは内側にある「ブタ」なる貪欲さについても何か考えようとすると、もう苦しくて何も思い浮かばなくなるといった事柄について明らかにしようと努めたのであります。おそらくそれら一切合財がジュリアンもしくはお父さんに投げ込まれ、つまり彼らに肩代わりさせてるわけで、だからそれで夜になると彼らが報復してくると感じちゃう、すなわち‘良心の呵責’ということでありましょう。

翌週のセッションで、彼はかなり複雑なややこしい遊戯に打ち興じ、それでいっそう事が明るみになってまいりました。それを彼は絵で示してくれたのですが、要するに《tip and run》のゲームです。そこでは、ど突いたり蹴飛ばしたりといった結構な悪さをするわけですが、それも急展開し、さっさとチャラに

されてしまうやら、まったくハチャメチャな冗談で覆い隠されておしまいといったことになります。例えば、こんなふうです。ひょうきんなおどけ者の‘フットボール’が‘花’に転じるといったことや、乳母車の中の赤ん坊が新聞を読んでいた男の背後にいて、その子が新聞(newspaper)の端をちょっと破ってしまう。それとも知らず、その破れた新聞に気がついた男は一瞬肝を潰し、<おや、まあ、ぼくパンツを破っちゃった！>と思わず叫ぶとやら・・・私が彼に、彼の赤ちゃんの部分が背後(つまりお尻)からさまざまに攻撃するといったことを物語っているようだねと語ります。攻撃相手というのは、私と一緒に居るお父さんみたいな男性だけど、その彼は私について何もかも(news)知ることが許されているわけで、それにそのお父さんはお母さんに興味津々でもあり、特にお父さんとお母さんとの夜のことなのだけだね、と語りますと、彼はいかにもぼくそれ知ってると言わんばかりに、<つまりこういったことだろ？>と、虎とライオンとを取り出し、それらを互いに取っ組み合せ、恐ろしげな唸り声を立て、噛み付かせるのでした。

彼はそこからさらに、極めて野獸的でどっちもが互いに破壊的であるところの両親の性交場面を詳細に繰り広げてゆきます。部屋中が騒然とした躁的興奮に包まれます。それもやがて椅子に飛び乗ろうとして靴を引っ掛けて、よろけてしまっておしまいになったわけですが。その瞬間彼は凝然と立ちすくみ、一瞬閉所恐怖症的な面持ちで、私への畏怖を露わにしたのであります。そこで<私はまるでこの瞬間、言うなれば夜中お母さんの内側に潜む、噛み付くおっかないお父さんになっちゃって、侵入してきた君を捕まえ、食べちゃうところだったんだね>と語ります。彼は沈静化してゆきます。どちらかという何やら考え深げであります。それからちょっとして彼は寝椅子に横になり、<ぼく、怠けもんなんだよ。トカゲみたいにさ・・・怠けものトカゲってわけ・・・>と言います。その怠けものトカゲは、昼食に大嫌いな緑葉野菜を食べさせられる学校に行くより家に居て寝床でぐずぐずしていたいのです。私は、おそらくトカゲになりたがっているのはジェームズなのだという話を語ってゆきます。実際に彼は‘外側の赤ちゃん the outside baby’でいなくちゃならないし、それでお母さんのオツパイをしっかり飲むよう励まねばならないというわけだから、もううんざりなんだよね。むしろお母さんの内側に留まり、なにもかもやってもらいたいってことね。それにお父さんが彼のペニスでもって夜になるとお母さんの中にそっと忍び込めると思っているわけで、だから今頃彼は彼女の中にいる、お腹の赤ちゃんみたいになって思うんだねと言います。彼はちょっと憂うつそうな表情で、<うん、そうだ。お母さんのお腹にずうっと居られたらって思う。だけど、お母さんは家にずうっと居られないんだ。仕事に出掛けなくちゃ>と言い、それからひどく悲しげに<お父さん、とつてもきつい仕事を頑張ってたんだよ。それで稼いでぼくらにいろんなものを買ってくれたんだ。台所の水屋の修理もしてくれだし、車の運転だって出来たし。ぼくにはそんなこと何も出来ないよ。お母さんが今それを全部しなくちゃならない・・・いつかお母さんはおそらく再婚すると思う。だけど今年じゃないよ。もし誰かいい人と出会えたとしてもね。おそらく赤ちゃんが出来るね。ほら、女王さまだって4人も子どもを産んだじゃないか・・・>と語ります。このセッションはこんなふうな、ジェームズは考え深げにあれこれ頭の中で思いを反芻し、いわば己れのスピリットを鼓舞せんと努めたということになりました。

この次のセッション(第4回目)では、いくらか脱線気味だったところから舞い戻り、いよいよ彼は本格的に転移上の‘お母さんとしての私 mummy-me’に対して懐くさまざまな赤ちゃん的願望のアンビバレ



ンスを示してまいります。悪戯っぽい顔をしてポケットから《あなたへの贈り物》というのを取り出します。それは‘お猿さんの指人形’でありました。＜食べちゃうぞー。とってもお腹すいてるんだって。人肉が好物なんだってさ。だけど大人の人肉はお断りだって、子どもの人肉が食べたいってさ＞と言い、その顔の向きを変えて、自分に噛み付かせます。ここで私は、そうした彼自身の中の‘貪欲な部分’としてのお猿さんの指人形について語ってゆきます。それが自分だって彼は知りたくもないわけで、だから父親のペニスにそれを投影したんだということを。この間、‘お猿さん’は怒り狂ったように手当たり次第部屋中のものに噛み付き、その挙句に汚い色と彼が思ったクレヨンを手にして、《ブタ pig》と書き綴ったのです。それからちょっと穏やかに落ち着いてきて、あれこれ言葉を書き連ね、それにいちいち「反対語」をも書き添えました。そしてふと手を止め、考え深げに＜お父さんは死んでなんかいないよ。お母さんが嘘ついているわけではないだろうけどさ。でも、ジュリアンだって、お父さんは死んじやないって言うんだよ＞と言います。彼はここで再びひどく混乱した趣きを呈します。そして私が＜どんなこと考えてたのかな。話してみて・・・＞と促すと、彼は巨大な、太った、有史以前の生き物ステゴサウルス〔剣竜〕の絵を描きました。茶褐色のクレヨンで、そのでっかい足と歯を塗ります。そして、＜これ、メスだよ＞と言い、その絵をクチャクチャに丸めてしまいます。私は、それは彼の‘赤ちゃんの部分’の心の内に思い浮かんだ絵なんだろうねと語ります。すなわち、‘恐ろしげなお母さん’なのです。それもウンチやら、彼女が食べた赤ちゃんやらお父さんの残骸でいっぱいになっているというわけです。すると、彼はひどくそわそわ落ち着かなくなります。そこで私は、こうした彼が想像する‘お母さん像’というのが、外界のお母さんの姿をそのままに見ることを邪魔しているとも言えるし、それから彼がお父さんは地獄にいるんじゃないかと思ったりするとき、おそらくその彼が意味するところのものも描かれているわねと示唆します。

第5回目のセッションで、私は彼に、館内のリフトは3階以上の利用者のみで使用が許され、われわれ2階の利用者は使用できなくなる旨を告げました（それはそのような布告が事前にあったからですが）。彼は朗らかに、＜リフトってあれば便利でいいよね。だけど、上下に動くだけじゃなくて、水平に動くのがあれば、ぼく乗ってみたいなあ・・・＞とお喋りをします。それから私が、彼はどうやらお母さんのお腹の中に居られたらいいな、そしたら始終運んでもらえる、そんな赤ちゃんでいたいって思ってるみたいだわねと言いますと、彼は私に異議を唱えます。＜そんなの逆だよ。ぼくは大人の男になるんだ。それでリフトでどこへでも旅ができるといいんだがなあって思うんだ・・・＞と。

この頃、もうそろそろセッションを終了させる時期を考えるべきなのではないかと私は思い始めておりました。母親からは、以前のようにゲームズとの関係もしっかりしてきたと伺っていましたが、私との転移関係の深まりが小児的な依存性を募らせてゆくのは目に見えており、今後さらにより長期に亘っての治療というものに切り替えるならともかく、おそらくこのままでは失望を招くであろうと懸念されたからであります。

そこで、この第5回目セッションに、彼がより潜在期の子どものやる‘学校ごっこ’のようなゲームに熱中し始め、彼は先生になり、私に算数の課題をやらせて、そしてこれはダメ、間違っているなどと嬉しそ

うに訂正することに興じていた折、彼に「今では学校ではもう問題なく楽しく過ごせているようだね」ということを示唆します。さらに「たぶんここでそろそろ君がここへもっと通ってくる必要があるかどうか考えて見なくちゃね」とも言います。彼は、すぐさま紙を私の頭の上の辺りでクチャクチャに握りつぶすという反応に出ます。それはまるで彼の頭に私が痛撃を与えたみたいで、それへの仕返しといった感じなのであります。彼の「赤ちゃんの部分」は私の内側に永遠に留まることを願っているということのようでもあります。しかしながら、このセッションですぐこの後、ごく自発的に彼自らの内省に立ち返り、「ぼく、ちょっとは良くなったと思うけど、だけど全然大丈夫じゃないってこともあるんだ・・」と言います。「今でも《ブタ》って言っちゃうことがあるしさ。それって言っちゃいけないって言われているのに、忘れちゃう。お母さんはそれを言ったら、お尻を叩くって言ったんだけど・・」なんだそうです。その後で、彼は、ちょっと躁動的でバカ騒ぎ風な《Fanny Craddock Haddock》のゲームに没頭します。その意図するところとは「オッパイ」がくれるものをダメにしてしまうといったことのようなのでした。つまりは彼の後に続いてやってくる子どもたち、すなわち「他の赤ちゃん」というわけですが、彼らが私から「思考力への食べ物 food for thought」をもらうのを邪魔しようとしているといった意味合いでもあります。このセッションの終わりに、彼が退室する際、とても真面目な顔つきで、「ぼく、ちょっとはましになってる。だけどここを止めるまでにはもっとうんと大丈夫って思いたいんだ。あのね、ここであなたが見てる子どもって、ぼく一人じゃないの？ ……もしかしてお母さんはもう他に赤ちゃんを産まないかも知れないよね。・・だってさ、お母さんには結局2人も「母親」が、あつ、じゃなかった、「息子」がいるんだし・・」と言いつつ添えます。

第6回目とその次のセッションにおいて、彼はいつここを終えるかということに気持ちが奪われておりました。私自身はこちらから彼にそれを改めて問うことはありませんでした。彼がどう決断し、終結をいつにするのか、それを見守っていたということになります。

彼は快活なふうを装い、「ぼく、リフトを使いたいんだけど、いいかな？」と尋ねました。だがそれを言う前から直に、「おそらく上の階の人たちが必要としているだろうから・・」と自分で諦めました。階段を昇り切ったところで、彼はくんと鼻をかきます。「料理の匂いだね。でもとてもいい匂いだ」と言い、それから彼は昨日の学校の給食がとてもご馳走だったことを付け加えます。「ほうれん草を除いてだけさ・・」と、これを言うとき彼は顔をしかめて大仰に呻き声をあげました。それから入室後、寝椅子に数分間横になり、それから立ち上がって、何か描いておりました。それは出来上がるまで私には見えないように隠しておりました。そして彼は言うには、ある男が立っていて、家を購入するかどうか思案しているんだとか。それって買えるのかな、どうだろうというわけです。それからゲームズは、家族皆で夏の休暇に出掛ける費用を工面できるかどうか考えていたのだと言います。彼自身としてはそんな遣り繰りの算段など出来はしないわけで、でもおそらくおじいちゃんが何とかしてくれるだろうから、それできっとぼくらは飛行機で行くことになるんだと言います。それからいかにも打ち明けるふうで、「ぼくが飛行機が大好きだってこと知ってるよね」と、私に訊きます。

そのすぐ後、再び彼は寝椅子に戻り、横になります。怠けてぐずぐずしているのが大好きだってことを

言います。しかしすぐに立ち上がり、お絵描きに取り掛かります。そして今度の絵は男の人で、その彼のなかに小さな男がもう一人おります。それは《チャイニーズ・ピクチャー》なんだそうです。つまり‘入れ子式’というわけで、その男が、中にいるもう一人の男を食べたというわけです。<この中の男は死んでいるんだ。いや、やはりそうじゃない。本当は死んではないんだよね・・・>と言います。それからジェームズは、<ぼくって大きいんだよね。だってお父さんがぼくの中にいるんだもの・・・>と言い出します。紙を裏返して、彼は何かを描き、私にそれは何だと思いかと尋ねます。それはヘブライ語の文字なんだとか。私が<それって、まるで十字架にかけられたキリストみたいに見えるわね>と言いますと、彼は感極まったふうに、<なんて賢いだろう、よく当てたねえ！>と喜びます。その十字架の下に彼は歯のような釘を何本か描きます。それから二人の天使たちも。その一人は女の子の天使で、キリストの死を嘆き悲しんでいるのです。もう一人の方は、特に明示されてはいないのですが、どうやら悲しむ代わりに怒っているふうでありました。彼は、その紙を放り投げてしまいます。そして、<キリストってバカだよ。ぼく、もう行っていいかな？>と言います。そこで私は、<今すぐ何が何でもここを出てゆかなきゃって思ったんだね。君にはお父さんの死をめぐろごちゃごちゃした思いがあって、どうにも片付かないわけで、それらを片付けないままほったらかしにしてしまうってことだよ>と彼に語ります。それからさらに、その‘ごちゃごちゃ’とはまた、お父さんの位置を奪わんとする彼の欲望であったりするわけで、彼はそれを痛く嘆いてもおり、それはどうしたって自分がお父さんの位置を奪うなんて出来やしないって解ってるわけですし、だから否応なしに彼の喪失、それにお母さんの喪失をも考えねばならないことになるということをも・・・それで彼はもう耐えられない気持ちになり、お父さんを咎めたくなり、なんで死んじゃったのかとバカ呼ばわりにしたというわけなのでありましょう。ここでジェームズは絵を二つに引き裂き、どっちを自分が持って帰りたいのか、どっちをここに置いておきたいのかという話をします。<怒りの感情をここに置いてゆくんだ。そして悲しみだけを持って帰ろう。・・・バカ呼ばわりもここに置いてゆく。・・・いや、やはり悲しみも消してしまおう・・・>と言います。彼は頭を両腕に突っ伏し、そして言います。<ぼく、お父さんが死んで、もう悲しくてたまらないんだ・・・それで、ここにずうっとずうっと来たいと思ってるんだ>と言います。それからちょっと気を引き締め、<来週また、一緒にどうしたらいいかここで話そう・・・ぼく、良くなってるよね。だけでももう少しほんとに大丈夫って思うまで、ここに来たいと思う。だから来週ね、ぼくら一緒にもっと話して話してみることにしようよね>と言います。

翌週、実際にはわれわれは‘もっと話して話して’というふうにはなりません。恰も彼は、もうセッションを終えたかのようにあり、ただそれでいいかを確かめにやってきたといった具合なのでした。彼は《蛇とはしご》というすごろく遊びの一種を携えてまいりました。セッションの殆どをその遊びに没頭しました。私との対戦というわけで、いつも私がさんざんな目に遭うと喝采し、だがまた同時に私がそれほどひどく負けがこまないようにと気遣ったりもするのです。彼は突然、セッションの時間も終わり近くになった頃、<ぼく、もう随分と良くなってる・・・>ということと言います。それで、<おそらく大丈夫だろうと思う>ということでありました。

部屋の去る前に、彼は一枚の絵を描きました。ロケットが太陽と月との間に向けて発射された絵で

あります。ロケットの両側は太陽と月の色彩に溶け込むように彩られました。月はチーズで出来ているんだとか。太陽は、地球を熱で温かくしているんだけど、でも死んでいるんだとも言います。彼は絵を半分半分にして、片方の半分を私の手元に残し、後の半分を家に持ち帰るつもりなのでした。でも彼はそれを引き裂いてしまうと、動揺を隠せません。その良い方を自分が持ち帰るか、もしくは私の手許に残すべきか、迷います。が、それからその千切れちゃった方も悪くないということにして、それは私がもらっていいことにしました。良い方のは彼が自分のために取っておきたいと思ったからです。そして彼は、ほんとはもう一度リフトに乗りたいんだけど、だけどそれって上の階の人たちが使うわけだから、やはりぼくはいいことにすると行って諦めました。いかにも格好つけたふうに、でもちょっぴり残念そうでもありましたが、そうして彼は去って行きました。

彼の母親が私に電話を寄越しました。<もうMrs. Harrisに会いに行くことはない。大変なことが起きない限りはね>と、彼は言ったそうです。その‘大変なこと’というのは、おそらく母親の死を意味たのでしょう。彼は、或る意味、今や自分には二人の母親がいるということを感じたようであります。つまり現実の母親の身に何ごとかが起きたときには、私に頼ればいいんだということになりましょうか…。

さて、おそらくこのようなセラピイについて誰もがさまざまに疑問を懐かれることと思われます。人生がひっくり返されるような悲劇に遭遇し、その意味を問い、かつそれに耐えようと葛藤する幼い男の子にさらなるセラピイの機会を与えずに打ち切ったわけですから、この別れは私にとってもいくらか心残りでもありました。

愛する人を喪った際の‘喪の作業’とは、実に時間が掛かるものであります。それは或る意味、それぞれ心の内で、ごく私的に *privately* なされることであり、それは子どもですらもそうでありましょう。又その一方でさらには、同じ喪失を嘆く他の誰かと共に傷みを分かち合うことでなされることもありましょう。もし喪ったのが親ということであれば、もし可能ならばもう一方の親と一緒に、であります。死んだ親は、その喪が悼まれるばかりではなく、遺された者たちによって共にその面影が偲ばれる度に心 (*spirit*) の内で甦るのであります。喪失の痛苦とは、回想すること *recollection* の快さと同時にあるといってもいいでしょう。遺してもらったものの有り難さを自覚することは、そうした贈り物をいっそう豊かなものにしないうわけはありません。小児的な占有欲、もしくは万能感に関連するアンビバレンスから生じる罪悪感、こうした回想の持続的なプロセスを邪魔し、そして喪った対象の甦りを無効とするやも知れません。それはまた悪くすれば、その死んだ当人、或いは投影によってそうした悲劇を招いたとして咎められる人たちから迫害されるということが密かに心の内で永続化されないとも限りません。

ジェームズの場合、こうした僅かともいえるセッションからでも、どうか安定感を取り戻し、彼の中の混沌としたごちゃごちゃな思いを整理することが始められましたし、その心の傷みそして己れ自身の咎めの意識にも耐えて、母親との以前のような親密で信頼に溢れた関係性に戻ってゆけたわけです。かくして残酷な運命に見舞われ、混乱をきたした家族にしても、いつしか時の流れの中で気持ちが徐々

に宥められ、過去を現在に、そして未来へと希望を繋いで生き続けてゆくことができるようになってゆくものと考えられました。

もしもここで、ジェームズが私に会いに来る以前の状況で、上記したような自然の時の流れに身を任せて癒されるといった喪の作業の可能性を妨げたものが何であったのかを問うならば、おそらくセッションの中で彼が提示したところの素材に幾つかその答えが見出されるものと思われます。それら躰きの要因というのは相互に絡み合っており、各々それ自体が決して十分に解明されているとはいえませんわけで、おそらく今にしてはもはや何がどうだったとも言えないでしょう。しかしながら、父親の死という出来事が彼にもたらした意味がどれほど複雑なものか、そしてこの意味に彼が取り組もうと懸命に格闘した、その尋常ならざる力量が例証されていたように思われます。彼は己れの考えに否応なしに引き摺られ必死に取り組んでいたものの、それらを表現し得る適当な手段を欠いていたというわけでしたから、私は、セラピイの場で彼と共にありながら、常に彼のリードに付き従い、そして私の言わんとなることが彼に伝わるように描写することで、それら彼の思いつくさまざまな事柄をより明らかにしようと努めるばかりなのであります。

肝心なことは、こうしたことは彼が予め心の準備があつてのことではないということです。彼はそれ迄に人生において誰かを喪つたことで苦悩したということはありません。ただ遊戯場面を通して申せば、‘オッパイの喪失’といった早期の経験が振り返られていることが幾つか示唆されましょう。(例えば、‘フットボール’が実はほんとは‘花’だったといった素材がそうです。)そして実際のところ、人生の中で遭遇するいかなる喪失も、このごく早期に喪われたところの‘オッパイ’という‘原初的部分対象’を改めて賦活させます。それは、われわれの臨床体験からして、われわれの殆どにとって周知の事実なのであります。それで必ずしもジェームズの場合、離乳そしてそれにまつわる喪失体験が致命的な打撃であつたことを意味しているとも言えませんでしょう。たとえそれが心的現実においてどれほど不完全なかたちで受容されたのであつても…。離乳とはいつも誰にとつてもそうしたものでありましようから。父親の死によって、彼は、己れ自身の喪失ばかりではなく、兄にとつても、そしてまた特には母親にとつても、それがどれほどの喪失かということを深刻に直視せざるを得なかつたのであります。彼の家族全体が、そして彼の世界全体がごちゃごちゃになつてしまつたのです。両親に愛されている幼い子どもがごく普通に心の拠りどころにする‘理想化’—親に賦与されている力、永続性そして安全性—が突如として崩壊したのでありますから…。

こうした事態では、ごく自然ながら、一体誰がこんなことを惹き起こしたのかという考えに苛まれます。誰かのせいではなければこんなことは起こるはずがないというわけであります。彼がお父さんを怒鳴つたせいなのだろうか？ そう思うと、居ても立ってもいられないわけなのです。それでそうした‘ブタ・ジェミー’は、苦し紛れに己れの‘ブタなる部分 piggishness’をジュリアンに投影し、彼のせいにしたわけなのであります。それと深いところで何もかもが母親のせいだと思つたことで、その恨みを母親に投影することもありましたでしょう。

母親を咎めることで、母親の苦痛をさらに耐え難いものにしたせいもあり、彼はますます彼女に近づきにくくなり、それでいっそう彼女を咎め立てるといった悪循環を招いたわけであります。日頃自分が大事にしている玩具を壊してしまった子どもが、それを足で踏んづけて、<どっちにしても、もうダメで使いもんにならないのだから・・・>と腹立ち紛れに言うようなものであります。これらの根底にある感情は貪り食うところの‘原初的対象’—剣竜ステゴサウルス—への深い猜疑心であります。‘原生の邪悪なオッパイ’はごく自然な正常な発達において、‘理想的な対象’から分裂排除されてゆきます。しかしながら、こうした予期せぬ災難に遭遇した折に、それは再び覚醒し、それ以前に母親から愛情が注がれ、慈しまれて世話もしてもらい、かつ理解しようとしてもらったことを通して培われたであろう‘理想化された母親’への信頼すらも根こそぎにひっくり返してしまうといった場合があるのです。

ジームズの場合、分析的なコンテイメントが与えられ、混乱が整理されてゆくなかで、母親とのかつての信頼の絆が再び立て直されて、彼にとって耐え難かった母親の痛みもより耐えられるようになり、そして彼女に倣い、その嘆きを、そしてかつての父親の愛の思い出の記憶をも一緒に共有できたものと思われまふ。こうしたプロセスは、初回のセッションにおいて、私が彼と一緒に、死んだお父さんへの恐怖心を‘恐ろしげな夜中の両親’に繋げて解明せんとしたときに、おそらくその口火を切ったものと私には思われまふ。まさに彼は手にしたパンフレットを私の引き出しの底へと突っ込む[投影]代わりに、彼自身のお尻の下へそれを突っ込み始めたわけですが、それは、女性的な体勢において、‘良きペニス’を撮り入れたこととなります。そうした‘良きペニス’とは、彼の溢れんばかりの感情のほとばしりを私が受容したこと、さらには彼が自らの情動や思考をまとめてゆくよう水路付けしたところの私の言葉から派生したものと考えられます。世界中で一番信頼した人が最大の疑惑の的とされ、かつ畏怖されることになったのであります。こうした場合には、子どもは己れの拠りどころとするところの価値観も、安全な居場所も、或いは明快なる方向性をも見失うといった‘ごちゃごちゃ’の混迷に陥り、深刻な退行的病状を呈することにならないとも限りません。

この後引き続いたセッションの中で、迫害的不安 persecutory anxiety が表出され解明されたことで、喪われた対象を回想し、そして撮り入れ内在化することのプロセスがさらに促されたように見受けられます。その一方で同時に、父親と彼自身とは別だということ、即ち彼は子どもであり、決して母親に対して父親の不在を埋め合わず‘肩代わり’など為し得ないといった事実を認めるに至ったものと思われまふ。これは又、彼の怒りと悲しみとの葛藤を潜り抜ける心的プロセスでもあったといえまふ。

こうしたことを認めることは、万能感にかかわる苦痛に満ちた葛藤を含むものともなります。必然的に占有欲は断念せざるを得ないでしょうし、起こった悲劇をそのままに受容し、誰かの咎としてその責めを負わせたりはしないこと、或いは簡単に解ったつもりにならないことが必要とされまふ。当然のことながら、彼自身にとっても母親にとってもその悲しみから互いを護るなど出来ないのですし、ただそれぞれが己れ自身の嘆きに耐え、傍らに居る者への心情にも寄り添ってあげるといった気遣いを分かち合うことで、幾らかその苦痛を和らげることができるだけです。そうした認識も折々に途切れがちです。

しかし一旦そうした気持ちに至るや、幾度となく行きつ戻りつしながらも、いずれそうした状態に収まってゆくものと思われます。すなわち、《抑うつ態勢 the depressive position》への到達といえましよう。

ジェームズは、明らかに並外れた知力に恵まれた、そして豊かな情緒性の備わった子どもであったと言えます。これらのセッションを通して混乱と迫害感が軽減されてゆくことで、母親そして兄さんと一緒に、どうか父親を悼む喪の作業に取り組めるようになったものと思われます。勿論のこと、それはこれから先もまだまだおそらく引き続いてゆくものと思われます。もしも喪われた、かつて愛した人が尚も生き生きとした記憶として心の内に残るならば、我々は日常の中で絶えず思い出すようにしなければなりません。そうした思い出に対して常に心が開かれているということが肝心なのです。かつての関係性が密接に絡み合っているならばなおさらに、しばしば遺された者にとっては苦痛に満ちたものとなります。しかしながら、やがてはそうした熾烈な心の傷みも、掛け替えのない貴重な内的対象の一部として懐かしみ愛おしむことになりましよう。

しかしながら、喪った人を思い出すにしても、それぞれ個々のペースでしかありません。無理強いされることはできません。かつて不可分に己れの生の営みのなかに織り込まれていた誰かが、からだは絶えず一緒にないにしろ、心の内では絶えず寄り添い一緒にあったわけで、その人がもはや外界においては存在しないという事実は何度も何度も直面し、愕然とせざるを得ないことになるのですから…。われわれは喪った人に再び会うことができないという事実をいつしかついには受容してゆき、そして万能感的な独占欲は断念されます。そのとき、われわれの心は否応なく己れの内側へと振り返りき、喪った人がかつて生きていたときに共有した経験をさまざまに蘇らせ、それを頼みとしながら前向きに生きてゆくことになるでしょう。それであればこそ、尚も生き永らえて前進してゆくわれわれの心の領域は広げられてゆくものといえましよう。それは、われわれの心の内に尚も息づいている、かつて愛情と憧憬を懐いた人への同一化 (identification)、そして対話 (dialogue) からくるものと思われるのです。

ジェームズが、母親の援助を得たとしても、彼自身の中で彼の喪った父親をいかにしてインスピレーションやら活力の再生への源として立て直してきたものか、私としてはそれについて充分には知り得ないわけですが、これらセッションの終わりに当たって、彼の母親の援助でもって、これから先、彼が尚もいっそう喪った者を内在化し、愛とともに回想することの余地を大いに残したものとしてその将来をかなり楽観していいように感じられたのであります。

\*\*\*\*\*

※ 《原典》: 《 The complexity of mental pain seen  
in a six-year-old child following sudden bereavement 》  
by Martha Harris  
【The The Journal of Child Psychotherapy】 (1973), Vol. 3 (3)

\*\*\*\*\*

## 【訳者あとがき】 ～心の握力とは何か～

山上千鶴子

このマーサ・ハリスの論文は、精神分析の文献として、権威筋からみればさほど高い評価を認められてはいないのかも知れない。何しろたった7回のセッションで終わった症例なのだから。だが、これは実に秀逸である。【精神分析】が本来成し得るもの、すなわち‘いのちに挺入れする’現場が証しされている。これこそ精神分析の‘賜物’として読み継がれていい。私はこの論文を読みながら、妙というか、或る不思議な感慨を覚えた。彼女が亡くなった1986年というのはもはや遠い昔ともなる。しかしながら今もって、その死があまりにも悲劇的ゆえに、「マーサ・ハリス」という存在の喪失の傷みにどう耐えたらいいのか、われわれは癒されることのない嘆きを抱えている。ところが時空を超えて、ここに、まるでわれわれの心に彼女が彼岸から手を差しのべてくれて、マーサ・ハリスを悼むわれわれを‘喪の作業’へと導いてくれたかのような気がしたのだ！彼女の言葉を一つずつ辿りながら、私自身が6歳の男児ジェームズとなり、そしてそれに寄り添うMrs. Harrisともなって、‘喪の作業’を共にした気がした。そして、なにやら私の‘ごちゃごちゃ’した心はようやく収まり、落ち着きを取り戻せたように思う。

<お母さんなんてまるでダメだ！お父さんを救ってあげられなかったじゃないか・・・(You are no good! You can't keep people alive)>。これらのジェームズの、母親へ投げつけた言葉、それは、<ぼくなんてまるでダメだ！お父さんを救ってあげられなかったんだから・・・>という思いの投影である。さらには、<なぜお父さんを死なせちゃったのか？>という問い掛けになり、<ぼくがお父さんを殺した>との断罪にもなる。だから、その隠れた罪障感を抉り出し、sorting-out[整頓]することがセッションの眼目となったわけで、セラピイのプロセスの筋立ては間違っていない。だが何よりも、この子の苦悩する魂には共感が必要であった。<そうだね。お父さんを死なせちゃったんだよね。悲しかったわね>って・・・。そして確かにここには、そのように寄り添うマーサ・ハリスの心がある。慈愛やら憐憫の情といったものが覗かれる。私はこの論文の後半、眼頭に熱いものが込み上げた。何しろこれが書かれたのは、マーサ・ハリス自身が夫ローランドを突然喪い、それから3年ほど経ていただけなのだから・・・。確かにこの頃メルツァーとの再婚でおそらく既に彼女は立ち直ってはいたと思われる。が、それで逝ったローランドへの思いが薄らいでいたともいえまい。微かにでも折々に寂寥感を懐く彼女がいたに違いない。この論文の終わりには、彼女の中に<ああ、大丈夫あの子は生きてゆける・・・(そして自分も・・・)>との眩きが聞えてくるようだ。再出発を期したのは患者だけではない。セラピスト自身にしても同じなのだ。彼女は、愛する者の喪失ゆえに己れの罪の咎めを深追いすることの虚しさを思ったのだろう。生き永らえることこそが肝心だとしたら、ジェームズの‘外側の子ども outer-child’としての気概を恃みとして、その行く末こそが後押しされるのがむしろ相応しい、おそらく実際家肌(up-to-the-down-earth)の彼女はそう判断したのであろう。ここに、そうした現実的ともいえる精神分析家としてのスタンスの有り様に、真に彼女の体験が生きている。やはりここで稀有ともいえることは、彼女のパーソナル personal な私、そしてプロフェッショナル professional な私、それらのいずれもが、セラピイという臨床の場で患者に対して与えられている(available)ことである。彼女自身という人(person)の中にそれらは溶け合っ



がない、そして何よりも嘘がない。実にこれが臨床家マーサ・ハリスの大いなる得難さである。これこそが‘心の握力’というものの真骨頂というものとも言えよう。すなわち、セラピストとして己れの発する言葉が己れの経験に根差している、この紛れもない事実こそが尊い。

だが、そうまくは行かないことが心理臨床の現実としてある。〈おまえなんかダメだ。誰も救えないじゃないか(You are no good! You can't keep people alive.)〉という罵りそして嘲りのことばは、否応なく心理臨床を生業としている者誰しもが日常的に遭遇するものだ。一度とならず、執拗に何度も何度も…。たとえ外側からでなくても、内側からの声として…。そして時として、非力ながら無力ではないはずといった楽観を突き崩すような、ポディーブローに見舞われることもあろう。

或る30代の女性が分析を受けに訪れた。ひと言でいえば‘のっぺらぼう’なその方は、臨床心理士の資格をめざしていた。主訴は自分が無いということ。自分が欲しいと彼女は言う。多くの‘罪’が語られた。家庭内での不和・対立、父親の暴力、母親のいじけきった無気力。そして祖母の自殺も…。父親が癌で亡くなった。その後、遺された母親と二人きりの暮らし。‘抑圧の連鎖’は尚も続き、母親からの厭味やら揚げ足取りに甘んじている。かつて母親に加担し、祖母を死に追い詰めたとの自覚があった。自分は‘被害者’でもあり、また或る意味‘加害者’でもあったと彼女は振り返る。それもこれも家族という‘塀の中’でのこと。おぞましい日常の中で彼女の魂は凍りつき、生きながら死んでいった。学校では‘お化け’と噂されていたんだとか。友だちはいなかった。だけど、「自分を持つ」など大それたこと。罰が当たると彼女は思い込んでいた。それで自分を書いたり消したり、あったりなかったり…。だけど‘のっぺらぼうの私’は案外‘怖いものしらず’なのだ。抜き差しならぬ自分はいないのだし、己れからの‘背き’など恐れることもない。‘のっぺらぼう’は‘水子’にも似て、流せばいいだけ。執着しなければこの世に怖いものなど無い。折々に‘のっぺらぼう’はMrs. Bickのいうところの‘second-skin(二次的皮膚)’を身に纏う。敢えて訳せば‘化けの皮’、それも折々に切り替えは自在である。彼女はどうか或る臨床機関にめでたく就職先が決まった。やれやれといったところで、分析開始後3ヶ月を経た頃、春の休暇からセッションに戻って以降、急速に戻つぽみとなり、5月の連休を待たずに頓挫した。結局のところ、私からすればもはや‘手出し無用・口出し無用’で終わったことになる。彼女の意識はどうやら立ち止まらず、新幹線の窓からの風景のように、辛うじて遠景は像を結ぶが、どれもこれもがただ流れと化してゆくようであった。留まるとは誰かと‘一緒である’ことの最低条件。心に留めるやら掴むやらは茫漠として、意識の焦点は霧散し、像を結ぶことはない。イナイナイパーでもない。イナイナイが永劫に続く。自分も私もナイ、欲望もナイ世界の住人として安らぐ。手が無い。抱かれようと抱きたいとも、どちらも無用というわけだ。だから気の咎めもありはしない。ほかんとしたまま…。

最後のセッションで、彼女はコートを脱がずに入室している。セッション中そのままの恰好で。そして退室する際、私の視界には前屈みに肩をすぼめた茶褐色のコートを羽織った彼女が映った。その後姿を眼で追いながら、一瞬愕然とし、内心慌てふためいた。予期しない、彼女の薄汚れた‘みすばらしさ’に動揺したのだ。生気のない陰気な横顔、それはもはや人間というよりも‘幽体’というか、恰も

異界へと引きずり込まれてゆく‘餌食’といった印象で、私は己れの錯覚を怪しんだ。灰色のクレヨンで1本だけしか持たず、まるで色という色が削られ剥がされたふうだった。その薄闇の、靄がかかった灰色へと、もはや私の手の届かぬところへ彼女は消え失せてしまった。私は内心焦りのあるものの、もはや手出しも口出しも出来なかった。そして間もなく、そうか、成る程そうかと、得心した。再び‘のっぺらぼうのお化け’になったのだと・・・。‘元の木阿弥’ということばが浮かんだ。イナイナイバーみたいに、そしてまるで手袋を裏返したかのように、今や真に彼女の内面の真実が露呈した。その苛烈にして荒廃を極めた風景が・・・。<私は絶望などしてません。なぜならこの世は美しいからです>と、最後に言い切った彼女を私は信じたかった。彼女は生きてゆけると・・・。だが、その言葉はどうやら彼女を裏切っている。美しいところではない、この世とはまるで醜悪で陰湿極まりない。そして片付かない塵芥をいっぱい背負い、そして抱え込んだまま、彼女はこのまま押し流されてゆく。<このままゆけば、もう後は墓場へ行くだけでしかないのかなあと思う・・・>とは、嘆息まじりの、彼女のかつての言葉であったわけだが・・・。

かつて《傾聴カウンセリング》の講習会を受講し、彼女は、それを欺瞞だと断罪していた。そうした‘尖鋭的なもの’を密かに隠し持つ彼女にもしかしてといった期待を私は抱かせられた。だが結局落ち着くところは、この世を薄っぺらに肯定し、誰の迷惑にもならない‘お利巧さん’に収まって、「人というのはこんなもの、世の中というのはこんなもの」と括ってゆくことでしかどうやらなさそうだ。手出し無用、口出し無用であり、口答えなど持ての外ということに尽きる。だが幼少期以降、とことん個我が根絶やしにされ、今尚も否応なく寄生(パラサイト)の身であったとしても、それを誰が悪いと言えよう。ようやく念願の大学院を修了し、就職先も決まったことだし、<偉いですわね。よく頑張っておいでなもの>と褒めて励ますしかなかろう。そうした reassurance(保証)をクライン派は忌避する。というか、実に苦手であるわけで・・・。ただ、そうした‘傾聴カウンセリング’をなぜ彼女は欺瞞と一度は断罪したのだろうかともむしろ訝しく思った。つまりは或る意味、彼女には分かっていたのだ。結局‘お利巧さん’とは‘誰かの都合’に嵌められ、そして貶められるということ・・・。親の理不尽に打ちのめされ、その痛手を深く負い、でも卑屈にならずに済んだのは、<怒りと悲しさがあったから・・・>と彼女は言っていた。しかし自分を持つなどということは所詮無謀だと覚ったみたいに、<変わらぬと思ってけど、やはりどうしたって変わりようがないんだと分かったから・・・>とすんなり己れの‘気の迷い’を払拭した。そうした恐れなど自ら封じてしまえば事勿れで手っ取り早い。要するに、柳田國雄のいうところの日本人の‘事大主義’、つまりは「長いものには巻かれろ」に屈することだ。そして、「眠った子は起こすな」ということにもなる。当然ながら、精神分析など所詮無駄ともなろう。またまた白旗を振るしかない我が身が悲しかった。実に<You are no good! You can't keep people alive.>なのである。惜しくも完敗といわざるを得ない。

さて、心理臨床に携わる諸氏は誰しも、‘救済願望’というものを承知している。むしろ自明の理だから、その有無などさほど問題にならない。助けてあげる・助けてもらうといったことだが・・・。助けてもらいたい人がいて、助けてあげたい人がいることにどんな問題があるというのだろうか。阪神大震災後、心のケアというものが巷にも浸透してゆき、心理職がようやくにして社会的に認知されていった。そこでは当然ながら<May I help you? (何かお手伝いさせていただきますか?)>の対人援助の精神

が基調となる。そうした姿勢が問われる。おそらくこれがProfessional Identityの根幹と思われてもいるわけだが。。

遠い昔の彼の地での私の教育分析の話だが、かつてトレーニング・アナリストの Miss. Weddellが私とのセッションの中で、<精神分析とは、幸福 happiness とは関係がないんです>と言ったことに猛烈に私が反撥したことが記憶されている。なぜか慌てふためいたのだ。私はおそらくどこかで<それじゃ困る！そんな「精神分析」なんて、日本へ持ち帰れないじゃないの。。>と内心思ったのだろう。私はまだ当時、日本での精神分析・心理療法が職業としてどのような発展途上にあるのか無知であった。それでも、私もまた当時、どこか眼の隅で【精神分析】が日本へ‘移植’されてゆくことの未来を追っていたのだろう。明治期以降の数多の海外留学生はおそらく皆そうだろう。日本に持ち帰られるものを探した。異文化を漁り、まずは手っ取り早く日本へ‘移植’できるものを探した。つまりこの場合、日本というのが‘市場(マーケット)’であり、勿論そこで売り物・買い物として‘値が付く’ということが前提条件になろう。そして結局のところ、その多くは大学というアカデミズムの権威を纏うことを無難と決めこみ、大学という教育機関に収まったはずだ。こうした‘学商’としての生き様を夏目漱石は‘不愉快’と断じて、ついに一蹴するに到った。《私の個人主義》から《則天去私》に至る文学者としての彼の道筋は実に辛いものがある。だが何故かどうやら今でも彼の人気は衰えない。不思議な気がする。現代の人の‘無いものねだり’を充たすものが彼にあるとしたら、それはなんだろう。そこに《眠った子を起こすな》ではなく、‘眠った子’が目覚めてゆく予兆を私は見るのだ。微かながらも。。

ここで一つ、ふと思い出したことがある。私は昔昔ミッションスクールで学んだ。英語担任が早稲田大学・英文科出身の村田一郎先生とおっしゃる中年の男性教師であった。彼から盛りだくさんの英語慣用例・常套句の類いを叩き込まれ、その暗記が毎週テストされた。今振り返れば、それらの殆どが古びたもので、既に当時の英米の日常では使われてはいなかったろう。だが、彼はそれに固執した。どうやら彼の早稲田在籍当時の教科書を使っていたみたいだ。英語力を身に付けるという名目に一応従いながら、どこか徒労感を禁じえない。でもその暗記に辛うじて耐えられたのは、そこに僅かでも当時の私の心の渇きを潤す真実のことばがあったからだ。その中に【Heavn helps those who help themselves】(《諺》天は自ら助くる者を助く)というのがあった。すなわち、‘自助精神’の称揚である。それが私の胸に刺さった。そして痛く気に入ったのだ。もしかしたらそれは‘異文化(すなわち基督教社会)’との最初の出会いであったのかも知れない。

それをまっすぐそのまま、己れの非力をも顧みず、私は愚かにも信じた。逆説的だが、まさに非力であったからでもあったろう。当時からどこか自分には‘生命力が薄い’といった危惧の念があったのだから。。私はどう生きてゆけるのか迷っていた。そして迷いながらも「自分こそが問題なんだ」という思いはとことん拭いようもなく、鬱々とした我が青春にあって、この【Heavn helps those who help themselves】という言葉が折々に記憶に甦ることがあった。もしかしたらこれは、夏目漱石の《則天去私》に一脈通じはしないか。だとすれば、彼の壮絶な悪戦苦闘の人生のわけが分かると言えなく

もない。異文化を輸入するとき、われわれは都合よく‘勘違い’をする。結局のところ、分かってることしか分からないのだから。マーサ・ハリスの論文の一つ『The Family Circle』(1967)を読んでいて、‘communality of spirits’という言葉が目をついた。‘協働精神’というわけだ。だがこれも、飽くまでも‘自助精神’が基盤にあってのことだ。そしてわれわれはむしろこの共同・協働精神の方はよく承知しているつもりだし、しっくりくる。つまり「お蔭さまで」の心である。だが、各自銘々に自助精神がないところではそれも事大主義へと雪崩込むむしかならう。そして日本の心理臨床に限れば、おそらくいずれエンカウンターやら傾聴カウンセリングが席捲してゆくことであろう。自助精神そして協働精神、どっちがどっちというのではない。どっちもが大事。つまりはコンテイメント containment ということが眼目であろう。自分を抱えられるか、誰か人を抱えられるかということ、そして生きてゆけるための契機を孕み続けてゆく、そうした心の営みこそがめざされている。本来の文学が、そして【精神分析】がめざすものとはそうしたものなのだ。まずは己れの‘因縁’を深く掘り下げ、その導きのままに、周りに目配りしながらも、怖がらずに経験を積み重ねてゆきたいものだ。マーサ・ハリスに倣って…。私もここに至ってどうにかそうした素直な気持ちに落ち着いた。

最後に、この彼女の論文に戻り、‘盲点’を一つ指摘したい。どうもジェームズを取り巻く外的状況が掴みにくい。なにやらジェームズの‘恨めしさ grudge’がうまく理解されていない。それは内的なものではなく、明らかに外的なものだ。どうやら父親の死をめぐる真実が、おそらく母親と兄には共有されていただろうが、幼いゆえに彼には秘されたのではなかったかと思われる節がある。Mrs. Harrisとの初回の面接の後、彼は母親に父親の死の真相を問い、墓参りにも行きたいと言ってるわけだから…。この‘自分だけ知らせてもらえなかった’、自分だけが‘蚊帳の外’に置かれたということ、つまりは‘子ども扱い’されたということに彼は憤っていないか。それが一つ。同じく、もう一つは母親が兄とは共有したところの悲嘆をジェームズには十分打ち明けていないということだろう。自分だって一人前だという気概が彼にあるだけに、そうした危機的状況の中で自分が母親になんら頼りにされなかったことの傷つきは深い。これが母親にはまるで分かっていない。Mrs. Harrisにはぼんやり分かっているものの、やはり彼を子どもと見做していることに限界を感じる。因みに、何故彼がわざわざ【ビートルズ】のパンフレットを持参したのかということだ。それはpotency[男性の性的能力]を象徴していると思われる。つまりはペニスである。誇らかに、自分も男だと彼は主張している。＜パパやお兄ちゃんみたいに、ぼくだって…＞というわけだ。マーサ・ハリスは初回到現れたジェームズを「a minute, vivid, poised little boy」と形容している。それを‘いかにも澁刺として、機敏でかつ落ちつき払った少年’と私はどうにか訳を試みたのだが。症例でここまで克明な患者の外観についての描写は珍しい。6歳児にしてはなかなか手ごわそうというか、カッコイイというか、気概に溢れた彼に彼女が深く印象づけられたのは間違いない。そして一連の出来事の中で、当然ながらそうした彼が自尊心を傷つけられたと思ったとしてもおかしくはない。ここで本来ならば、母親からの＜ごめんね＞が必要だ。＜ちゃんとあなたに話してあげなかったこと、ごめんね。あなたのことを子ども扱いにして、ちゃんと頼りにしてあげなかったこと、謝るわね。これからはママはあなたを頼りにするから、よろしくね＞って。そしたら彼の心は収まったろう！だが、この日本語の英訳は無理だ。そもそもあちらにはこうした‘発想’がない。＜ママは大丈夫だから…＞と言うだろうし、

外見からしてそのように彼女は振舞うだろう。夫を助けてあげられなかった・救えなかったという責め・咎めに彼女だって内心大いに苦しんだに違いないのだ。だが、それは「不合理」として却下された。それが普通だ。片付けてゆくしかない。それが日常というものだろう。だが、ヘブライ語を学んでいるとかいう、彼のユダヤ系の血筋の思慮深さゆえか、6歳の男児ジェームズはそれを欺瞞とした。＜ママが大丈夫なわけないよ。それって、嘘だあ・・＞というわけだ。だから、それで彼は彼女を詰ったのだ。＜You are no good! You can't keep people alive.＞そして彼女を泣かせたわけだが、彼の言わんとしていることは、その責め・咎めを感じてもいいんだということ、ぼくだってそうだから・・と、そんなふうになら彼女に教えたのだ。家族とは共有することなのだから・・。そして結果、彼は母親を最初にMrs. Harrisに、それから精神科医の面接へと導いたことになる！この一連の出来事の背景には、Mrs. Harrisのいうところの‘communality of spirits(協働精神)’が覗かれる。そうしてこそ家族が再び出会い直しができたということではなかったか。この家族の‘贖いの作業’に手を貸したセラピストとしてMrs. Harrisは大いに報われたものと思う。正直私は羨ましくてならない。

ここでさらに補足して、ジェームズの中の‘little husband(ちっちゃいハズバンド)’に注目したい。今尚も私はイギリスの子どもたちを深く驚嘆の思いで振り返るのだが、どんなに幼くとも、4,5歳児になれば当然、11歳ぐらいになればもう完璧に、彼らの中に‘ちっちゃいハズバンド(little husband)’と‘ちっちゃいワイフ(little wife)’が覗かれる。これは日本の子どもの比較において、特筆すべきことと思われる。‘夫婦’としての両親を摂り込んでいるのだろう。ごく自然に‘一人前’の性意識の芽生えが逞しい。この観点から、ジェームズの言い間違い、＜お母さんには結局2人も‘母親’が、あつ、じゃなかった、‘息子’がいるんだし・・＞(P.10)は実に傑作である。彼の中にお母さんを亡き父親に代わって護ってやらなきゃという献身、かつ気概がここに覗かれる。それも、自分を‘父親’ではなく‘母親’と言ってるわけで、なかなか‘芸が細かい’。夢にも似て、この‘失錯行為’は見事である！そして、Mrs. Harrisの真摯でひたむきな態度に接し、つまり彼の望むとおり‘一人前扱い’されて、どれほど彼の中の‘ちっちゃいハズバンド little husband’が満足を感じたか想像される。彼女はどのように語っている。＜〔彼は〕私の語る言葉を、恰もそれが自分の心の内から聞えてくる声でもあるかのように聞いておりました＞(P.3)と。これは不思議な感覚だ。おそらく彼女はジェームズに語りながらも己れ自身の喪の痛苦を脳裏に巡らせていたに違いない。彼女は心の内なる己れ自身の声を聞いていたのであろう。6歳のジェームズがそれにひたすら耳を傾ける。両者の共振し合う痛苦への感受性が貴い！

このジェームズの気概そして賢さ・聡明さが一体どこから来るのやら。やはりユダヤ系DNAの心の成熟・強靭さは恐るべしといった印象が残る。こうした子どもが実は彼の地での児童臨床を底上げしていることを思えば、私たちは安閑としていられない。ここに打ち明ければ、これ迄のところ私には一つの感慨として、どうやら【精神分析】というものは、用のある人には要るだろうが、用のない人にはまったく要らないものだというのがあった。それも良からうというのが私の見解である。だがやはり心底口惜しい。私たち日本での児童臨床がはたしてこうした真の思慮深さ、即ち‘心の握力’といった資質を育むことができるものか。あと百年を経れば、もしかして・・と夢見る。

(2014/05/05 記)